

野の仏ギャラリー④

大日如来立像

東多久町別府

蓮華台に立ち、頭上に台形状の宝冠を戴き、五智(仏)を五つの円で表しています。額に白毫、胸飾りがあります。手は左人差指を伸ばし、右手で握る智拳印を結んでいます。両腕には天衣が垂下しています。舟形光背には頭光が浮き彫りにされています。大日如来は密教において最高仏とされます。銘「東多久町新四國 第六十一番 本尊大日如来 小城郡 芦刈新村同行 昭和七年一月十日 建立」等の文字が刻まれています。



多久市郷土資料館長 藤井伸幸

○如来は真理に到達し修行を完成した者を称します。
○白毫は仏の眉間に生える白い毛で光明を放ちます。天衣はシヨール状の衣です。
○台座側面に「石工芦刈 永田光野竹一」と刻まれています。

今月の論語

十有五にして
学に志す

私は十五歳のときに生涯にわたり学問することを決めた。

今月の楠宅放送は、東原岸舎東部校9年 平山夏琳さんです

教育長コラム

ちよっとい話



「白菜、レタス、キャベツ」

本市で給食が始まった頃、学級で「この野菜は、白菜なのか、レタスなのか、キャベツなのか区別がつかない」とやんちゃな男子生徒が言い出して、みんなが驚かされたら笑わされたりすることが度々だった。

言っておくが、私は中学校で担任をしていた。発言の主は幼い子ではなく下級生が関わりたくなってしまうようなタイプの生徒だった。しかし、給食になるとあどけないものを大勢で食べるのが嬉しくて、素直に表現していたのかとも思えてくる。

そう言えば、前任校でも、異装し、おでこを剃り込んだ生徒が、白菜、レタス、キャベツの区別がつかなかった。

食卓を囲んで話したり、一緒に買い物に行ったり、食材を洗う手伝いをしたり、そんなささやかにみえる体験を積み重ねるって、成長の過程で大切なことなんだなあ。

教育長 田原優子

市民文芸

◆もう二度と悲しみなんて背負わない
夢という名の君を抱くだけ

◆同窓の友が逝きしと知りし宵
タイムスリップ 中学時代に

◆住む町の全景見下ろす岡に立ち
夫との歴史ひもとくときており

◆吾が植えし茄子生りそめて
差し当り 家族三人の用に事足る

◆「天井棧敷の人々」が好きとて 共通項を
支援の握手と共に告げたり

◆雨降れば庭木に触るる今年竹
武富 律子

◆縹雲無口な人の絵手紙よ
本村 則子

◆青柿や寺の古りたる鐘の音
倉成 皓二

◆蜘蛛の囀の風に膨らむ深庇
富樫 明美

◆枝芸天 喰重たく夏旺ん
おおやはな

◆運動会 素足で走る 昭和の子
田中 正春

◆アスファルトに咲く雑草の強い花
田代まつこ

◆逞しい根で伸びている夏の草
西山 残月

◆品格のネジをはずして 特売日
大谷 和

◆年金の通帳妻に握られる
松下 修